

平成 2 8 年 6 月 1 7 日現在

機関番号：33912

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770195

研究課題名(和文)バイリテラシー発達におけるインプットとメタ言語意識の役割

研究課題名(英文)The Roles of Print Exposure and Metalinguistic Awareness in Biliteracy Development

研究代表者

市川 新剛(Ichikawa, Shingo)

名古屋学院大学・外国語学部・講師

研究者番号：40634415

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、在日ブラジル人児童のリテラシー能力獲得においてインプットとメタ言語意識が果たす役割について調査を行った。アンケート調査と言語能力テストを用いた分析結果から、家庭内の読書環境とメタ言語意識にはあまり関連がないことがわかった。一方、家庭内の蔵書数はポルトガル語と漢字のディコーディング能力と中程度の関係があるが、平仮名との関係は弱いことがわかった。この結果から書記体系の種類によって必要なサポートが異なる可能性が示唆された。また、音韻意識は音韻構造の異なる二言語間でも転移することが確認されたが、L2ディコーディングにどの程度貢献するかは書記体系によることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study aims to investigate the roles of metalinguistic awareness and print exposure in low socioeconomic status bilingual children's literacy development. The analysis revealed that home print exposure influences children's phonological awareness and decoding skills. Further, three types of print exposure are differentially related to three decoding skills. The results also suggest that each decoding skill requires different types of support due to the properties of the writing systems. Moreover, metalinguistic awareness transfers across languages, even when languages have different phonological structures and writing systems. However, it was also found that phonological awareness contributes differently to the development of L2 decoding skills, depending on the types of writing systems.

研究分野：L2リーディング

キーワード：バイリンガリズム L2リーディング 継承語教育 活字接触

1 . 研究開始当初の背景

本研究の目的は、バイリンガル児童のリテラシー能力獲得において、インプットとメタ言語意識の役割を明らかにすることである。読みの入門期において最も重要なのは、表記法を理解し、文字を音声化する能力(ディコーディング)を身に付けることである。また、児童の活字接触(インプット)の量や頻度がディコーディング能力を発達させる上で重要であると言われている。しかし、これまでの研究はモノリンガルや社会経済的地位が比較的高い児童を対象にしたものがほとんどである。本研究では、在日ブラジル人児童を対象に、活字接触とメタ言語意識がバイリテラシー獲得に及ぼす影響を調査した。

2 . 研究の目的

本研究では、質問紙を用いて在日ブラジル人児童の活字接触量(print exposure)を測り、リーディング能力とどのような関係があるかを調べた。

3 . 研究の方法

(1) 研究 1

対象：小 1 ～ 2 年の在日ブラジル人児童 15 名 (1 年生 8 名、2 年生 7 名)

測定：受容語彙サイズ (Peabody Picture Vocabulary Test)、音韻意識テスト、ディコーディングテストによるリーディング能力の測定および家庭のリテラシー環境に関する質問紙調査

分析：質問紙のデータを数量化し、活字接触量でグループ分けを行い、各テストの得点の平均値を比較した。また、活字接触のタイプとディコーディングテストの得点の相関係数を算出した。

(2) 研究 2

対象：5 ～ 7 歳の在日ブラジル人児童 3 0 名

測定：受容語彙サイズ (Peabody Picture Vocabulary Test)、音韻意識テスト、ディコーディングテストによるリーディング能力の測定

分析：3 つのリーディングテストの相関係数を求めて 3 つのスキルの関係について調べた。

4 . 研究成果

(1) 研究 1

在日ブラジル人児童のポルトガル語 (L 1) と日本語 (L 2) のリーディング能力について測定し、記述統計を表 1 にまとめた。ポルトガル語 (L 1) と日本語 (L 2) の比較はテストの難易度を統制していないため単純な比較は難しいが、受容語彙サイズや音韻意識という口語との関係も強い能力はポルトガル語のほうが高く、読みと直接的に関係の

強いディコーディングは日本語のほうが高い傾向にあるようである。これはポルトガル語優勢の環境から日本語が優勢的な環境に入ったばかりであることと、学校教育を受けているのが日本語だけであることに理由があると思われる。また、浅い正書法 (書記素 - 音素の対応が比較的規則的) であるポルトガル語のディコーディングがほとんどできない児童が多いことも注目しておきたい。

表 1 .

タスク	N	Mean (SD)
ポルトガル語		
受容語彙サイズ	15	68.93 (11.30)
音韻意識 (Discrimination)	15	98.80 (1.78)
音韻意識 (Deletion)	15	47.33 (24.27)
ディコーディング	15	14.93 (30.22)
日本語		
受容語彙サイズ	15	53.87 (13.98)
音韻意識 (Discrimination)	15	94.40 (7.16)
音韻意識 (Deletion)	15	33.67 (26.08)
平仮名ディコーディング	15	85.73 (13.43)
漢字ディコーディング	15	23.20 (29.77)

次に家庭の活字接触と言語能力の関係について分析した。質問紙調査の結果は、数量的分析のために (例えば、毎日読む = 4 点、ほとんど読まない = 0 点) のように数値化を行って分析をした。数値化されたデータは言語別に合計値を計算し、家庭の活字接触を表す変数とし、平均値より上の児童を High グループ、平均値より下の児童を Low グループと 2 つに分けて分析を行った。表 2 はポルトガル語の家庭の活字接触とポルトガル語能力の関係を調べるため、High グループと Low グループの平均値を比較したものである。各言語テストのスコアは満点を 1 0 0 点とし

て計算されている。表からは、2つのグループは受容語彙サイズと音韻意識(Discrimination)には差がないものの、音韻意識(Deletion)とディコーディングに差があることがわかる。

また、日本語の家庭の活字接触と日本語能力の関係を比較した。結果はポルトガル語の結果とよく似ていたが、ディコーディングに関しては平仮名のみが2つのグループで大きな差は見られなかった点が異なった。

さらに、どのような活字接触がディコーディング能力と関係があるのかについて分析した。質問紙の問いの内容に応じて3つのカテゴリー（A：図書等の所有数、B：紙以外のメディア、C：文字媒体を用いた活動）に分類して分析を行った。Aの図書等とは、書籍、雑誌など、紙に印刷された文字媒体を家にどれくらい保有しているかについて尋ねた質問が含まれる。Bの紙以外のメディアとは、TVやDVDやインターネットなど、紙以外の文字媒体の利用頻度などについて尋ねた質問である。そしてCは、紙媒体を用いた活動（読書など）をどれくらいの頻度で行っているかについて尋ねた質問である。3つのカテゴリーの質問の数値化し、それぞれに合計値を計算した。そして、それぞれの合計値とディコーディングの関係の強度を調べるためスピアマン順位相関係数を計算した（表2）。ポルトガル語ディコーディングと中程度の相関があったのは、「図書等の所有数」と「文字媒体を用いた活動」で、「紙以外のメディアの利用の利用」とはほとんど相関が見られなかった。

表2．ポルトガル語（L1）の家庭の活字接触とポルトガル語（L1）能力の関係

	ポルトガル語ディ コーディング	ポルトガル語の図 書等の所有数	ポルトガル語の紙 以外のメディアの 利用の利用
ポルトガル語の図 書等の所有数	0.41	-	-
ポルトガル語の紙 以外のメディアの 利用の利用	0.02	-0.14	-
ポルトガル語の文 字媒体を用いた活 動	0.49	0.66	0.14

表3は日本語の活字接触の種類と日本語ディコーディング（平仮名、漢字）の関係についてまとめたものである。平仮名は「文字媒体を用いた活動」のみ中程度の相関があり、漢字は「図書等の所有数」と「文字媒体を用いた活動」の双方と中程度の相関が見られた。「紙以外のメディアの利用」との相関は弱かった。これらの結果から、「文字媒体を用いた活動」は3つのディコーディングの全てと関連がある可能性が示唆された。また、平仮名だけは「図書等の所有数」との関連が低く、他二つの書記体系と異なるパターンを示した。ただし、これらの結果はサンプルサイズが非常に限られたデータによる分析である

ことは注意したい。

表3．日本語（L2）の家庭の活字接触と日本語（L2）能力の関係

	平仮名ディコー ディング	漢字ディコー ディング	ポルトガル語と同 じ等の所有数	ポルトガル語の紙 以外のメディアの 利用の利用
漢字ディコー ディング	.535	-	-	-
ポルトガル語と同 じ等の所有数	.224	.744	-	-
ポルトガル語の紙 以外のメディアの 利用の利用	.214	.248	.268	-
ポルトガル語の文 字媒体を用いた活 動	.621	.555	.810	.121

（2）研究2

ポルトガル語と日本語の音韻意識の相関は強く、先行研究同様、音韻構造が異なる言語間でも転移は起こる可能性が示唆された（表4参照）。受容語彙サイズと平仮名ディコーディングの間には相関がみられたが、重回帰分析で先に音韻意識を入力すると、日本語の受容語彙サイズは平仮名ディコーディングを有意に説明しなかった。一方、漢字ディコーディングを従属変数にして分析したところ、日本語の受容語彙サイズは漢字を有意に説明した（表5参照）。

表4．

Variable	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 Length of formal education											
2 Japanese oral vocabulary knowledge	.72 **										
3 Japanese PA (discrimination)	.34	.56 **									
4 Japanese PA (deletion)	.67 **	.71 **	.61 **								
5 Japanese PA (total)	.59 **	.66 **	.85 **	.93 **							
6 Japanese decoding (Hiragana)	.80 **	.81 **	.54 **	.86 **	.81 **						
7 Japanese decoding (Kanji)	.69 **	.81 **	.82 **	.86 **	.85 **	.76 **					
8 Japanese decoding total	.75 **	.81 **	.57 **	.79 **	.78 **	.90 **	.79 **				
9 Portuguese oral vocabulary knowledge	.34	.22	.15	.22	.22	.33	.16	.28			
10 Portuguese PA (discrimination)	.13	.20	.72 **	.32	.54 **	.24	.32	.23	.19		
11 Portuguese PA (deletion)	.39 *	.45 *	.39 *	.58 **	.56 **	.52 **	.39 *	.46 **	.39 *	.39 *	
12 Portuguese PA	.30	.38 *	.68 **	.53 **	.66 **	.45 *	.42 *	.41 *	.34	.86 **	.81 **

** Correlation is significant at .001 (two-tailed).
* Correlation is significant at .01 (two-tailed).
Significant correlations displayed in bold.

表5．

Variable	Japanese decoding (Kana)				Japanese decoding (Kanji)			
	B	SEB	β	sr2	B	SEB	β	sr2
Step 1								
Length of formal education	1.654	0.238	0.80 ***	0.63	0.622	0.123	0.69 ***	0.48
Step 2								
Length of formal education	0.987	0.22	0.48 ***	0.14	0.239	0.101	0.27 *	0.04
Japanese PA	0.801	0.185	0.58 ***	0.13	0.49	0.085	0.82 ***	0.27
Portuguese PA	-0.156	0.233	-0.08	0.00	-0.176	0.106	-0.20	0.15
			R2change=.18***				R2change=.32***	
Step 3								
Length of formal education	0.75	0.248	0.36 **	0.06	0.099	0.108	0.11	0.01
Japanese PA	0.648	0.196	0.47 **	0.07	0.4	0.086	0.67 ***	0.15
Portuguese PA	-0.126	0.224	-0.06	0.00	-0.159	0.097	-0.18	0.02
Japanese oral vocabulary	0.319	0.175	0.24	0.02	0.188	0.076	0.33 *	0.04
			R2change=.02				R2change=.04*	

Note. *** $P<.001$, ** $P<.01$, * $P<.05$

まとめ

本研究の結果から、ブラジル人児童の家庭での活字接触は、受容語彙サイズや音韻意識

(Discrimination)とは関係が弱かったが、音韻意識(Deletion)とディコーディングとの関係がみられた。また、活字接触の中でも、実際に文字を読む活動の頻度がディコーディング能力と関係が強く、紙媒体以外のメディアとの接触はディコーディング能力の発達には関係が弱いことが示唆された。さらに、活字接触のディコーディングへの影響は、教育の有無や書記体系の性質によっても変わる可能性も観察された。しかし、本研究は、非常に限られた数のデータでの分析であり、その結果の解釈は限定的である。活字接触との因果関係を立証するための横断的研究、また、家庭の活字接触量の測定方法についても改善が今後の課題であろう。

また、本研究の結果から、音韻意識は音韻構造の異なる言語間でも転移は起こるが、転移した音韻意識がどの程度ディコーディングに貢献するかは、書記体系による可能性が示唆された。

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

市川新剛 (2016) 家庭の活字接触とバイリテラシー能力の発達の関係. 名古屋学院大学論集 社会科学篇 53(1).

6．研究組織

(1)研究代表者

市川新剛 (Ichikawa Shingo)

名古屋学院大学・外国語学部・講師

研究者番号：40634415